

# アンラールの『フランス考古学入門—服飾篇—』

助手(西洋服装史) 斎藤多香子

長い時間の蓄積がもたらした豊かな世界に読む者を旅誘う文献との出会いは本当に心踊るものだが、今回紹介するカミーユ・アンラール(Camille ENLART 1862-1927)の『フランス考古学入門、メロヴィング朝からルネサンスまで』(*Manuel d'archéologie française depuis les temps mérovingiens jusqu'à la renaissance*, éditions Auguste Picard, Paris, 1902-1916. 本館所蔵本では再版本を含む1916-1932、服飾の巻は初版本である。

[383.135-E])も、このような一冊である。著者のアンラールはパリ国立古文書学院出身の考古学者、とされているが、数々の著作からは、むしろフランスを中心とする中世からルネサンスまでの建築史の研究者と捉える方が適切であろう。この著作が世に問われた当時は、トロカデロ比較彫刻美術館で主要な地位に就いている。

『フランス考古学入門』は、内容上三分冊からなり(製本は五冊になっている)、

## 第I巻 宗教建築

第1部 メロヴィング朝、カロリング朝、ロマネスク期

第2部 ゴシックと呼ばれているフランス期、フランボワイヤン様式とルネサンス

## 第II巻 民間建築と軍事建築

第1部 民間建築

第2部 軍事・海軍関係の建築

## 第III巻 服飾

という構成である。アンラールは続けて、家具、彫刻、手工芸についても書く予定でいたようだが、結局、服飾の巻が最終巻となった。第I巻、第II巻が900ページ余り、第III巻も614ページに及び力作で、しかも、各巻とも着実に版を重ねたようである。服飾の巻については、さらに目次を書出

してみよう。

## 第1部 衣服

I. 布地 II. メロヴィング朝とカロリング朝の衣服 III. ロマネスク期の衣服 IV. 13世紀から14世紀初期の衣服 V. 14世紀中期から14世紀後期の衣服 VI. 15世紀からルイ11世治世までの衣服 VII. シヤルル8世からアンリ4世までの服飾

## 第2部 髪型

I. 男性の髪型 II. 女性の髪型

## 第3部 装飾品

I. 毛皮と皮革、刺繍や飾り紐 II. 服飾に縫い留められる装飾 III. 手袋、靴、靴下留  
IV. サンチュール ドゥミ・サン エシャルブ ベルト、細ベルト、綬

## 第4部 特殊服と表徴的な服

I. 子供服地 II. 典礼服と典礼の表徴  
III. 宗教外の表徴と印 IV. 仮面と仮装、不名誉な表徴 V. 軍装

## 結論

これらは各章のタイトルであって、それぞれさらに2~27の節に分けて説明されており、当時の服飾語彙を知る上でも優れた文献である。

資料としては、教会を主とするさまざまな建築に付されている彫刻類、パリ国立図書館をはじめとするフランス全土に亘る図書館の文献と手稿資料、公文書、墓碑等を用いる実証的方法で、多くの例証を糸で綴り合わせていくように淡々と記述する、という姿勢をとっている。図版も豊富で、フランスはもとより、版を重ねる頃には第二次世界大戦のため入国不可能となるドイツの建築資料も含まれ、それらの写真とアンラール自身の素描が理解を助けている。戦争破壊により今では現存しない資料も記されていると考えられる。

さて、服飾史文献としての本書の特徴を挙げてみると、まず、服飾を身にまとうすべての人々を書き尽くそうとした視野の広さであろう。どうしても社会の上層部に生きた人々の服飾史になりがちなの領域で、一般民衆の服や子供服の他、社会の周縁部の人々の衣服への視線も、この著者は忘れてはいない。この結果、読む私たちは、これらの服を着ていた(着ざるを得なかった)人々の構成メンバーとして見落とすことなく、一つの社会像を思い描くことができるのである。第二の特徴としては、章立てが異なる基軸に拠る二重構造になっていることである。一つは時を軸として明確に捉えられる服飾の形全体<sup>かたち</sup>の変化の移りを、さらに他の一つは、特殊記号としての働きに応じて、服飾を時間軸というよりも、個々の特性に即してまとめていく、というものである(典礼服、宮廷服、仮面、道化師、袖など)。第三の特徴としては、奢侈禁止令を時代毎に独立した節にしたこと、そして最後に、著者の専攻分野である建築からの視覚資料が極めて多いことである。絵画や版画資料を主に扱かう文献の多い中で、空間的な彫刻資料は貴重である。

ここで、若干の瑕瑾ともいうべき惜しまれる点を——というよりむしろ、後続の私たちに課題として残された点を——付け加えておくと、せっか

くこれだけ豊かな資料を並列しながら、当時の人々の生彩ある声が、よく聴こえてこない、ということであろう。おそらく、アンラールはこれに気づいていたのであり、だからこそ、二重の章立てを組んで特殊記号としての服飾をまとめたのだと思う。しかし、たとえば仮面を取上げる時、その使用例の並列はかけがえのない資料であるものの、なぜ、どのような心で、それらの仮面を人々はかぶり遊んだのか、ということを考えずにはいられない。そして、それらを問いつめてこそ、服飾史の豊かな世界が開けてくるように思われる。さらに他の一点は、教会建築の彫刻例が多く引かれているのだが、特に聖人たちの彫像から、当時の人々の服飾を導くことが可能なのだろうか、ということだ。資料にはそれぞれ固有の性格があり、その読みとり方を資料それ自体に十分に尋ねた後に解釈していかなければならないのではないだろうか。

しかしながら、中世の服飾語彙研究さえほとんどなされていなかったこの領域で、原典第一主義に基いて多くの語彙を拾い出し説明を加えたこの業績は、服飾史の研究史上一つの新しい局面を切り開いたのであり、高く評価されるべき労作である。

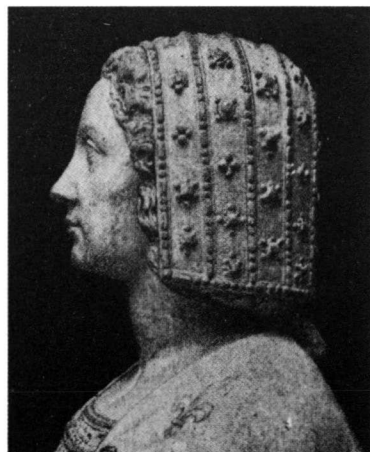
女性の髪型の章の図版資料(P.215)より



①



②



③

①パリ西方ブルの町の教会にある聖カトリヌ像 16世紀初頭の作品(聖カトリヌは、洗礼直後にキリストが婚約者として選んだと伝えられる聖女で、冠を戴き手に本を持って表現される。) ②レイ11世紀であったシャルロット(1445-1483)の墓碑肖像 サン・ドニ聖堂 ③フランス王妃であったクロード・ド・フランス(1499-1524)の墓碑肖像 サン・ドニ聖堂